

打ち負かし (Swamping) 問題と信頼性主義

谷川綜太郎 (Sotaro Tanigawa)

千葉大学

知識の価値をめぐる議論 (Zagzebski, 2003; Kvanvig, 2003) において提起された問題に、打ち負かし問題 (Swamping Problem) と呼ばれるものがある。これは、次の三つの理論的前提を同時に採用することで生じる矛盾をどのように解消するかという問題である (cf. Pritchard, 2011)。

1. メノンテーゼ (Meno's Thesis) : 知識 (knowledge) は、単なる真なる信念 (true belief) よりも高い認識的価値を持つ。
2. 真理主義 (Veritism) : 認識的価値の唯一の源泉は真なる信念であり、信念が持ち得る他の認識的性質 (正当化されていることや、信頼できる仕方で得られていることなど) に伴う認識的価値は、真なる信念というより基本的な認識的価値に対する道具的価値 (instrumental value) に過ぎない。
3. 打ち負かしテーゼ (Swamping Thesis) : もしある性質 F の価値が、より基本的な価値 G に対する道具的価値に過ぎず、かつ既に G が得られているなら、F は価値を付加しない。

この問題に対する有望な戦略としては、知識を達成 (achievement) と見なし、達成の最終的な (非道具的な) 価値を擁護することで、真理主義を否定する戦略 (Greco, 2010) があるほか、メノンテーゼを放棄したうえで、(信念間の構造的関係の把握を伴う) 理解 (understanding) の価値に焦点を当てる、修正主義的な戦略 (Kvanvig, 2003) などもある。

しかし、今回考えてみたいのは、あくまでも信頼性主義の枠組みだけでこの問題を解決できるのかという問題である。ここで、信頼性主義者が利用できる有望な戦略として考えてみたいのが、Goldman と Olsson (2009) による、条件付き確率による解決 (Conditional Probability Solution, CPS) である。CPS によると、知識は、もしそれが得られているなら、将来的に同じタイプの真なる信念が得られる確率が高まるため、単なる真なる信念以上の価値がある。すなわち、次のような条件付き確率の差があり、それが知識における付加的な価値を生み出している。

$$P(\text{将来の真なる信念} | \text{現在の知識}) > P(\text{将来の真なる信念} | \text{現在の単なる真なる信念})$$

たとえば、ラリサに行く途中の分岐で、信頼できる車のナビゲーションシステムが正しい方向を案内したとする。このとき、打ち負かしの考えでは、既に正しい方向が得られている以上、それが信頼できる仕方で得られたという事実は価値を付加しない。

それに対して CPS の考えでは、信頼できる仕方で正しい方向が得られているこの状況は、信頼できない仕方で正しい方向が得られている別の状況と比べて、次の分岐でも正しい方向が得られる確率が高いため、より価値が高い。

しかし、この説明にはいくつかの問題がある。まず考えられるのは、CPS が成り立つかどうかは実際の状況に依存する、という問題である。たとえば、もし仮に知識が得られていたとしても、それを生み出したプロセスが実際に再利用できなければ、将来的に真なる信念が得られる確率は高まらない。とはいえ、この点については Goldman と Olsson 自身も認めており、致命的な問題ではないと論じている。おそらくより重要な問題は、直接的に価値を産出しない確率上昇のようなものを実質的な価値と認めて良いのか、という問題である。Olsson (2009) は補足的な議論において、そのようなものは指標的な価値 (indicator value) を構成すると考えているが、見掛け上の価値 (apparent value) に過ぎないという考え (Dutant, 2013) もある。

本発表では、ここで説明されている知識の付加的な価値が、実質的には信頼できるプロセスの価値に依存しており、知識それ自体の価値を特定できていないと指摘することで、CPS は打ち負かし問題に対する有効な解決にはならないと主張する。

参考文献

- Julien Dutant. In defence of swamping. *Thought: A Journal of Philosophy*, 2(4):357–366, 2013.
- Alvin Goldman and Erik Olsson. Reliabilism and the value of knowledge. In *Epistemic Value*. Oxford University Press, 2009.
- John Greco. *Achieving Knowledge*. Cambridge University Press, 2010.
- Jonathan Kvanvig. *The Value of Knowledge and the Pursuit of Understanding*. Cambridge University Press, 2003.
- Erik Olsson. In defense of the conditional probability solution to the swamping problem. *Grazer Philosophische Studien*, 79:93–114, 2009.
- Duncan Pritchard. What is the swamping problem? In *Reasons for Belief*. Cambridge University Press, 2011.
- Linda Zagzebski. The search for the source of epistemic good. *Metaphilosophy*, 34(1–2):12–28, 2003.